

6 3 6 1 - 9 9 1
平成 2 1 年 3 月 2 5 日

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 2 0 年度病害虫発生予報第 1 2 号について
平成 2 0 年度病害虫発生予報第 1 2 号を発表したので送付します。

平成 2 0 年度病害虫発生予報第 1 2 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。
発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	いもち病		2
	イネミズゾウムシ		2
	スクミリングカイ		2
野菜・工芸作物	アブラムシ類	やや多	2
施設野菜全般	病害一般		2
	タバココナジラミ類		2
冬春キュウリ	べと病	並	3
	うどんこ病	並	3
	褐斑病	やや多	3
	ミナミキイロアザミウマ	並	3
冬春ピーマン	うどんこ病	やや少	3
	斑点病	やや多	3
	黒枯病		4
	ミナミキイロアザミウマ	やや多	4
冬春トマト	灰色かび病	多	4
	葉かび病	やや多	4
	タバココナジラミ類	やや多	4
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)		5
冬春イチゴ	うどんこ病	多	5
	灰色かび病	多	5
	ハダニ類	やや多	5
カンキツ	そうか病	やや多	5
	かいよう病	並	5
	ミカンハダニ	やや多	6
チャ	カンザワハダニ	多	6

作物の生育状況 (3月中旬)

早期水稲は育苗期から定植期、冬春キュウリは収穫期、冬春ピーマン・冬春トマト・冬春イチゴは収穫期であった。

4月の気象予報

天気は数日の周期で変わり、気温は平年並の確率40%、降水量は少ない確率40%、日照時間は多い確率40%と予想されています。

(1か月予報 鹿児島地方気象台3月20日発表)

発生予報の根拠および防除対策

早期水稻

1 いもち病

[防除上の注意]

- (1) 補植用の置き苗は、いもち病の発生源となるので早めに処分する。

2 イネミズゾウムシ

[防除上の注意]

- (1) イネミズゾウムシに効果のある育苗箱施薬剤を使用していない水田では、発生が目立ち始めたら(10株当たり成虫数5頭)直ちに粒剤の水面施用を行う。

3 スクミリンゴガイ

[防除上の注意]

- (1) 用排水路からの侵入を防ぐため水の出入り口にネットを設置する。
(2) 田植後 2 ~ 3 週間にはできるだけ水深 1 c m 以下の浅水管理とする。
(3) 貝の生息が多い場合には、薬剤の育苗箱施用と本田施用を実施する。

野菜・工芸作物

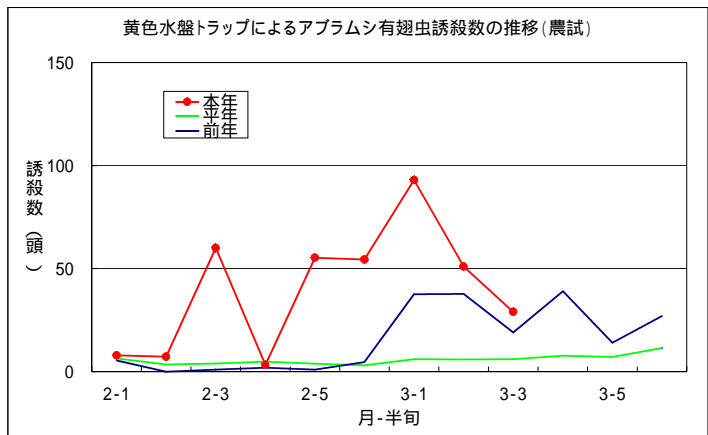
1 アブラムシ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 黄色水盤トラップによる誘殺状況は右図のとおりで、平年よりやや多い傾向である。

[防除上の注意]

- (1) ウイルス病を媒介するので早期発見・防除に努める。



施設野菜全般

1 病害一般

平成20年度病害虫防除情報第8号(3月24日発表) 参照

今後、気温の上昇に伴い各種病害の発生に好適な条件となるため、気候の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底する。

また、夜温も高めに推移することから、加温機が稼働しない日が多くなり、施設内が多湿になりやすいので加温機での送風や循環扇を活用する。

キュウリ：べと病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病、褐斑病など

トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など

ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病、軟腐病など

2 タバココナジラミ類 (タバココナジラミ、バイオタイプQ、シルバーリーフコナジラミ)

[予報の根拠]

- (1) 冬春キュウリでの発生面積率27.3% (平年28.8%)、100葉当たり虫数1.8頭 (平年13.8頭) はいずれも平年並である。
(2) 冬春ピーマンでの発生面積率14.3% (前年13.3%、前々年7.7%) は前年と同程度、100葉当たり虫数0.14頭 (前年0.27頭、前々年0.15頭) は前々年と同程度である。
(3) 冬春トマトでの発生面積率58.3% (平年28.0%)、100葉当たり虫数3.8頭 (平年2.3頭) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) タバココナジラミ バイオタイプQとシルバーリーフコナジラミの形態上の差異は成虫、幼虫ともに確認されておらず、両種の肉眼での区別は困難である。
(2) 多発するとスス病を併発して商品価値を著しく損ねるので初期防除を徹底する。
(3) 低密度でも、トマトではトマト黄化葉巻病 (T Y L C V)、ウリ科作物 (メロンやキュウリ) では退緑黄化病 (C C Y V) (仮称) を媒介することが明らかになっているので、特に注意が必要である。
(4) 防除対策については、トマトのタバココナジラミ類 (4 ページの 3) を参照のこと。

冬春キュウリ

1 ベと病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率54.6% (平年74.8%)、発病葉率12.5% (平年19.9%) はいずれも平年よりやや少である。
- (2) これまでの天候不順の影響で、草勢の衰えが見られる。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件下で発生しやすく、発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- (2) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率18.2% (平年39.5%)、発病葉率0.6% (平年5.2%) はいずれも平年よりやや少である。
- (2) 長期予報では、日照時間は平年より多い確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。
- (2) 薬剤耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (3) 乾燥時に発生が多くなるので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3 褐斑病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率54.6% (平年32.3%) は平年より多、発病葉率7.1% (平年5.2%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。
- (2) ベと病、うどんこ病の後に激発することがあるので、これらの病害から徹底防除する。
- (3) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。

4 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率18.2% (平年17.4%)、発病葉率0.4% (平年0.6%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。

冬春ピーマン

1 うどんこ病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率35.7% (平年58.6%)、発病葉率2.2% (平年7.0%) はいずれも平年よりやや少である。
- (2) 長期予報では、日照時間は平年より多い確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- (2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。

2 斑点病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率71.4% (平年31.7%) は平年より多、発病葉率5.7% (平年2.7%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を

行って茎葉が過繁茂にならないようにする。

- (2) 病原菌が植物体に侵入した後では防除効果が上がりにくいので、予防散布を行う。

3 黒枯病

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率は7.1% (前年20.0%、前々年0.0%)、発病葉率は0.1% (前年3.4%、前々年0.0%) はいずれも前年より少ない。

[防除上の注意]

- (1) ほ場内が多湿条件にならないよう、排水に努める。
(2) 発病果・被害茎葉は、伝染源となるのでほ場外に持ち出し適切に処理する。
(3) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。
(4) 同一薬剤の連用は、薬剤耐性菌の発生を招く恐れがあるので避ける。

4 ミナミキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率42.8% (平年31.3%) は平年よりやや多、10花当たり寄生虫数1.0頭 (平年1.9頭) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 10花当たり寄生虫数が1頭から被害果が出始める。また発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除を徹底する。

冬春トマト

1 灰色かび病 (多)

平成20年度病害虫発生予察注意報第6号 (3月24日発表) 参照

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の茎葉での発生面積率91.6% (平年20.7%)、発病株率12.8% (平年1.3%) はいずれも平年より多、発病果率1.5% (平年1.3%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) ハウスの換気に努めるとともに、曇雨天日に防除する場合はくん煙剤を使用する等、ハウス内の湿度が高くないようにする。
(2) 発病果・被害茎葉は、伝染源となるのでハウス外に持ち出し処分する。
(3) 薬剤耐性菌が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

2 葉かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率33.4% (平年23.8%) は平年よりやや多、発病葉率7.5% (平年2.9%) は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
(2) 発病初期の防除を徹底する。

3 タバココナジラミ類 (シハ¹-リー²コナジ³ラミ、 外⁴コナジ⁵ラミ ハイタイ⁶Q) (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率58.3% (平年28.0%)、100葉当り虫数3.8頭 (平年2.3頭) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミ類の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
(2) タバココナジラミバイオタイプQに効果のある殺虫剤が少ないことから、発見したら早めに防除し、薬剤散布後は防除効果を確認するとともに、必要に応じて適宜追加防除を行う。
(3) 施設内外の雑草は、コナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
(4) 有効な薬剤に対する抵抗性の発現を回避する観点から、同一及び同一系統の薬剤の連用は極力避け、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現の可能性が低いポタニガードES等の微生物農薬や粘着くん液剤等の、コナジラミを物理的に窒息死させる薬剤を防除体系に組み込む。

4 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率8.3% (前年7.7%、前々年16.7)、発病株率0.5% (前年0.2、前々年0.2%) はいずれも前年と同程度である。

[防除上の注意]

- (1) 発病株は伝染源になるので根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので、発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

冬春イチゴ

1 うどんこ病 (多)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率69.3% (平年20.7%)、発病葉率6.7% (平年1.2%) はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
(2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。
(3) 親株から苗に伝染するので、親株床・育苗時の防除を徹底する。

2 灰色かび病 (多)

平成20年度病害虫発生予察注意報第6号 (3月24日発表) 参照

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率30.8% (平年6.4%)、発病果率1.8% (平年0.2%) はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、換気に努めると同時に、薬剤散布、灌水にあたっては施設内の空気湿度を高めないように留意する。
(2) 発病果・被害茎葉は、早めに摘除してほ場内に放置しない。
(3) 薬剤耐性菌が出現しやすいので系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3 ハダニ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率84.6% (平年57.3%) は平年よりやや多、寄生株率19.4% (平年17.7%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
(2) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
(3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
(4) 親株から苗に移行し増殖するので、親株床・育苗時の防除を徹底する。

カンキツ

1 そうか病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の越冬葉調査では、発生面積率5.0% (平年2.4%) は平年よりやや多、発病葉率0.4% (平年0.1%) は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。
(2) 重点防除時期は、発芽初期・落弁期・梅雨期であるが、春葉での感染が多いと開花後果実への感染を抑えることは難しいので、特に発芽初期から展葉期の防除が重要である。

2 かいよう病 (並)

- (1) 3月中旬の越冬葉調査では、発生面積率10.0% (平年23.6%)、発病葉率1.2% (平年2.9%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。

(2) 防除は予防散布が原則である。

3 ミカンハダニ (やや多)

[予報の根拠]

(1) 3月中旬の発生面積率35.0% (平年38.8%) は平年並、寄生葉率12.8% (平年9.1%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

(1) 本虫の要防除水準は、寄生葉率30%あるいは葉当たり寄生虫数0.5~1頭である。特に冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では、発生状況に注意し要防除水準に達する前の発生初期に防除する。

(2) 同一薬剤及び同一系統薬剤の使用は年1回が望ましい。

チャ

平成20年度病害虫発生予察注意報第5号 (2月25日発表) 参照

1 カンザワハダニ (多)

[予報の根拠]

(1) 3月中旬の摘採面での発生面積率69.2% (平年43.9%)、寄生葉率10.6% (平年3.1%) はいずれも平年より多である。

(2) 茶樹裾部での発生面積率100% (平年60.9%)、寄生葉率24.3% (平年6.1%) はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

(1) 一番茶萌芽期の防除は、発生が多くやむを得ない場合のみとする。また、今年は生育が早いので、使用時期に注意し摘採前日数の短い薬剤を選択して防除する。

(2) ツマグロアオカスミカメとの同時防除の場合は、ダニを主体とした散布量(400g/ha)とする。

(3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

その他

1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センターホームページ

(旧 農薬検査所) <http://www.acis.famic.go.jp/>

2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤 (商品名、マリックス乳剤、粒剤等) は使用しないこと。

3 発生量 (程度) の区分

多	い	(高	い)	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い		(やや高	い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並				平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない		(やや低	い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない		(低	い)	やや少ないの外側10%の度数の入る幅

(平年値は過去10年間の平均)

4 予察情報の種類

病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

(1) 予 報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。

(2) 注 意 報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。

(3) 警 報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。

(4) 特 殊 報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。

(5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を掲載しています。ぜひご利用ください。

【 文書取扱 】

病害虫防除・肥料検査センター 生頼

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp

